

ヒトデ物語

嵐の後、女の子が浜辺を散歩していました。女の子は、砂浜がヒトデでいっぱいになっていることに気がつきました。自分の想像をはるかに超える量でした。

「このヒトデはどうなるのかしら？」と女の子は疑問に思いました。

「水なしで長く生きていけないのは確かだね」と思いながら、ヒトデを踏まないように、ゆっくりと気をつけて浜辺を歩きました。それくらい、たくさんヒトデがいました。

少し歩いていくと、ヒトデの中に立っている男の人がいました。女の子は好奇心にかられ、男の人の近くに歩いていきました。

「何をしているのかしら」と女の子は思いました。

「ヒトデを一つ一つ拾って、海に投げ返しているわ！」

「おじさん、何しているの？」と女の子は男の人に声をかけました。

男の人は顔をあげて女の子を見ましたが、何も言いませんでした。そして、黙ってヒトデを拾っては海に投げ返していました。

「おじさん、ヒトデの数に気がついているの？ 100、いえ1000はあるわよ！」と女の子は大声で叫びました。しかし、男の人は返事もせず、黙々とヒトデを海に投げ返していました。

「ヒトデの数が多すぎる！何も変えられないわよ！」と女の子は男の人に近づいて言いました。

男の人はヒトデを一つ拾い、女の子の顔を見ました。そして、男の人は今までの中で一番力強くそのヒトデを海の遠くへ投げました。ヒトデが海に落ちた音を聞いた後、男の人は女の子のほうを向いて言いました。

「あのヒトデの運命は変えることができたよ」

